

プロテスタント貴族とジョン・ノックスによるスコットランド宗教改革運動についての一考察

—1557年～1559年の変遷— (2)

A study of the Scottish Reformation by the Congregation of the Lords and John Knox
-the change from 1557 through 1559 (2)

伊勢田 奈 緒

本論文（前号と本号の2回分けているが）の目的は、1557年～1559年におけるスコットランドにおける宗教改革運動をプロテスタント貴族とジョン・ノックスの関わりから考察するものであるが、前号は、(1)当時の時代背景、(2)「貴族の会衆」の結成、(3)1557年に大陸にいたジョン・ノックスとスコットランドのプロテスタント貴族とで交換され、「貴族の会衆」の発足当時の動きがわかる書簡の翻訳という内容であった。本稿では、(1)「貴族の会衆」による「私的教会¹⁾」の活動の発展、(2)「貴族の会衆」と摂政ギーズのメアリとの闘争、(3)ジョン・ノックスの「貴族の会衆」に対する期待、(4)摂政の解任に至る経緯について、(5)「貴族の会衆」の意義について論じたい。ノックスと「貴族の会衆」たちにとって、1557年～1559年というわずか二年間であるが、その間、スコットランド宗教改革を実現するために、共に理解しあおうとしながら、また互いに補いながら、過ごした意義ある月日であったと考えられる。彼らにとってのこの凝縮した期間を考察することは、スコットランドにおける宗教改革がなぜ、急速に成功を修めたのかを理解するのに役立つものであると考える。

1. 「貴族の会衆」による「私的教会」の活動の発展

ノックスによれば、「貴族の会衆」結成後まもなく、プロテスタント貴族やバロン²⁾たちは協議のうえ、2つの重要な事を決議し実行したことがわかる。まず一つは、教会に関するものである。日曜日ごとにスコットランド国内における各教区内で「共同祈祷書」を朗読し、私宅において教理の学び、説教、聖書解釈を行うことが決議された³⁾。第二は、1558年11月20日付けで摂政に宛てて「会衆」の名で、最初の請願状⁴⁾を提出したことである。その請願は5項目からなっていた。すなわち、(1)公的であれ私的であれ、自国語による礼拝を行う集会の自由、(2)その集会における聖書解釈の自由、(3)自国語による洗礼式の自由、(4)自国語によるパンとぶどう酒の聖餐式の自由、(5)邪悪な高位聖職者の改心、以上5項目であり、彼らは、これらを要求した。ところが、摂政はこれに対

¹⁾ Privy Kirk による訳。

²⁾ バロンの称号は男爵領 (barony) と呼ばれる荘園の保有者を指す。

³⁾ John Knox, John Knox' History of the Reformation in Scotland, vol.1 p.137-138

⁴⁾ Ibid., pp.15-151

して何の返答もなかった。

当時のスコットランドではカトリック信仰者である摂政の統治下であり、プロテスタント信仰者たちは、当然、公に礼拝を守る教会をもっていなかった。故に、「私的教会」と呼ばれる「カーク(教会)」が、プロテスタント信奉する者たちの運動の拠点となっていく。この組織は、1560年に宗教改革者が勝利するまでは、地下組織の運動として活動した。聖書研究や礼拝のための秘密の会合としての「私的教会」は、プロテスタント側のネットワークの中心として重要であった。私的教会は、当局によって侵害され、また侵害されそうなプロテスタント信奉者たちと連絡をとりあう場所であり、また、彼らを守るための組織でもあった。最初は、孤立し、分散した存在であったが、まもなく、組織化されていき、そこでは、戦闘体制も整えていく機関ともなった。そもそも、スコットランドでは、1541年に、議会で、教養ある平信徒たちが自国語の聖書を読んだり、私的に集まって議論する宗教的集会の是非が、問題となり、私的集まりや異端の秘密の会合を禁じることが決められていた背景があった⁵⁾。このことから、1541年までに「私的教会」が存在し、政府側はこれを危険視していたとみられる。

プロテスタント貴族たちは、1558年11月20日付けで摂政へ、この1541年の禁令に対する請願書を初めて提出した。しかしながら、この禁令は実際には効果が全くなく、1550年代、秘密集会は、巡回のプロテスタント説教者たちの努力を通じて、持続し、強化され、説教者たちは私的教会に集まった人々に、聖餐式を執行し始めていた。これは、ノックスがジュネーブから一時帰国した1555年から1556年におけるミッションに関係しているとみられる。ノックスはスコットランドに滞在中、組織化されないままに成長してきたプロテスタント運動を強化しようと努めた。第一に、彼は信徒たちがミサに出席するのを阻止し、聖餐を正しく執行することを勧めた。ノックスは、聖書にあるように、「主の名」によって集まる者が2、3あれば、そこで聖餐を執行するように導き、この方法で、「会衆」の組織化を図ろうとしたのである。まさに聖餐による交わりからの組織化であった。

ノックスによれば、1558年には、ダンディーやその他の町で、信徒によって、教会規律を実施するための長老選挙が行われた。長老が選出されたのは、この時点で、公の説教者がいなかったからであったようである⁶⁾。このように、スコットランドの一部では、宗教改革が成立する前に、長老が選ばれ、聖餐を執行する「私的教会」が設立されていたのである。この時点の「貴族の会衆」たちの問題は、政治的問題よりも、圧倒的に信仰についての問題が緊急なものであったと考えられる。つまり、彼らはスコットランドにプロテスタント教会が樹立することを純粋に熱望していたのである。ノックスは宗教的熱情をもって彼ら、貴族の会衆たちに、カルヴァン主義に基づく教会設立を勧めたが、他方、プロテスタント説教者たちは宗教改革運動を計画し、実行に着々と移していこうとしていた。ノックスがプロテスタント貴族へ宛てた1557年12月17日付けの手紙の中で熱心に説いた「主を畏れる」信仰をもつことの大切さが、彼らの心にしっかりと植付けられ、宗教改革運動へ

⁵⁾ Nigel M.de S.Cameron (ed.), Dictionary of Scottish History and Theology, Edinburgh,1993, p.679

⁶⁾ John Knox, John Knox's History of the Reformation in Scotland,vol.1 p.148

の意欲が沸き起こり、その具体的な表れとして、摂政に請願状をぶつけるまでになったのかもしれない。

当初は「私的教会」の数はほんの一握りであったかもしれないが、しかし、「貴族の会衆」の主導の下、その数は、見る見る間に増えていき、一気に大きな組織へと発展していったと思われる。「私的教会」の1557年から1559年の活動は、宗教改革運動の核である貴族の会衆を支える大きな力であったと言えよう。

スコットランドの宗教改革運動は以上、見てきたように会衆の指導層である「貴族の会衆」とその下部組織とも言える私的教会の働きは大きいと考えられる。そしてさらに、加速する原因を助長したのが二点あると考える。それは、第一に、イングランドに起こった政権交代という大きな出来事である。すなわち、1558年11月17日イングランドでは、カトリック信仰のメアリー・チューダーに代わって、プロテスタント信仰のエリザベスが女王となったことである。この交代によって、イングランドの方針は大きく変わった。エリザベスの統治下では、宗教はもちろんのこと、政治的にも、国際的にも大きな方向転換を行なわれた。このことは、宗教改革を遂行しようとしているスコットランドのプロテスタント側にとっては、実に重要な出来事であった。つまり、彼らはスコットランドの宗教改革を行う際、プロテスタントへ移行するであろうイングランドの援助を大いに期待したからであった。第二に、宗教改革運動における精神的指導者であるノックスの帰還である。「貴族の会衆」を中心とする「私的教会」のプロテスタント支持者達にとって、これから行おうとしている革命とも言えるような運動を実行するにあたって、1559年5月にイングランドや大陸で多くの宗教改革者と交わり、またカルヴァンに支持していたノックスがスコットランドに帰国してきたことは心強いものであったにちがいない。彼は同年7月7日に早速、エディンバラにおいて「会衆」によって牧師として選ばれた。もちろん、ノックスだけが、スコットランドにおける説教者で、改革者であったのではない。しかし、不撓不屈のバイタリティーをもった精神的指導力者としての彼の存在は、なくてはならない存在であり、宗教改革運動の成功も、スコットランド教会形成も、彼が大きな役割を果たしたことは確かなことである。大陸において、ノックスはスコットランドの「貴族の会衆」たちに間接的に多くの勧告や励ましをしていた。しかし、帰国後の彼は真の意味でのスコットランドの「貴族の会衆」たちの実践的指導者として活動し、また、プロテスタント信者たちを慰め、励まし、牧会者として大いに働いた。

2. 「貴族の会衆」と摂政ギーズのメアリとの闘争

なぜ、純粋で霊的教えに基づく教会の改革を求める静かな信仰上の運動が、ダイナミックな宗教改革運動へと変わっていったのであろうか。それは、この運動が摂政ギーズのメアリとプロテスタント貴族である「貴族の会衆」との対立であり、それを突き上げる背景は、政治的要素が強いからである。エリザベスによる統治に変わったイングランドとスコットランドの政治情勢の変化、フランスとの長期にわたる利害関係、続いて1558年4月摂政の娘メアリがフランス皇太子フランソワと結婚によりスコットランドをフランスの属国となりかねない事態、ローマカトリック教会の聖職

者の職権乱用と高圧的な態度に対する不信、反抗などが絡んで、スコットランドはまさに、摂政側か、「貴族の会衆」側か、どちらに進むか、スコットランドの将来を決定づける変換の時であり、急速に両陣営は一触即発の戦闘体勢へと向かっていた。この変質を詳しくみてみよう。

1559年1月1日に「会衆」の運動が大きな転換点を迎える。ルターが1517年にヴィッテンベルク城教会に貼り付けた「95か条の提題」の事件を彷彿させるようなことがスコットランドにおこった。すなわち、王国内の托鉢修道院の扉に匿名の「乞食の召喚状」⁷⁾ が貼られた。これは、同年の聖霊降臨日に托鉢修道士は修道院を立ち退くように警告したものであり、以後、富裕で墮落した托鉢修道院への攻撃が始まったのである。この事件はプロテスタント側が暴力を使い先鋭化し始めた最初の出来事であった。この攻撃を起こす思想的源泉は、ノックスの主張、すなわち、偶像崇拜者を処罰するために蜂起することは、「神の民」の信仰的行為であるとする主張に帰するものであろう。また同月、イングランドのエリザベスの秘書長官ウィリアム・セシルとレシングトン⁸⁾、スコットランドがイングランドと結び、フランス軍を排除するという条約の草案を立案した。提案された条約は、最終的には、1. 全フランス軍はスコットランドから離れること。2. フランス国民はスコットランドで営業をしてはならないが、スコットランド人は以前のようにフランス市民権を享受し続けることができる。3. スコットランド人がギーズのメアリを摂政として、また、彼女の娘を正当な主権者とするとしていた。

次に1559年3月に摂政ギーズのメアリは、プロテスタント側に対して攻撃を始めた。それは、摂政の娘メアリとフランス皇太子フランソワの結婚後、1558年11月に身分制議会にてフランソワ皇太子に対する配偶者王位継承権が承認され、王女メアリがスコットランドの王位をフランスに対して確保されることが決定されたからである。また1559年春、スペインとフランスがカトー・カンブレジ条約を結び、両国がプロテスタンティズムを根絶することに注意を向けることが自由になったことにもある。故にプロテスタントに対して寛容方針をとっていた摂政であったが方向転換し、徐々に勢力をもってきた「会衆」に対して敵視する方針をとるようになった。宗教改革運動に対して抑圧政策をとっているフランスとの関係を保つためにも、摂政側はスコットランド国内にいるプロテスタントに対して断固とした態度をとっていくことにしたのであろう。

摂政と「会衆」との間の闘争は、摂政の命令に反発することから開始した。「貴族の会衆」を中心とするプロテスタント側も、1559年のイースターにミサへの参加を命じ、聖餐式執行を禁じた摂政に対して、反抗の行為を示した。すなわち、プロテスタント説教者ポール・メスヴェンとジョン・ウィロックと他2名の説教者たちは、摂政の命令を公然と無視し、聖餐式を執行したのである。摂政は同年5月10日にこの4名に対して、異端を説き人々を煽動した理由で、スターリングの枢密院に召喚した。しかし、彼らが出頭しなかったため、同年5月11日、この4名は法律保護権を停止され、「反徒である」と宣言されたのである。

⁷⁾ John Knox, *John Knox's History of the Reformation in Scotland*, vol.2 pp.255-256

⁸⁾ レシングトン (1525-73) は1558年にギーズのメアリーの秘書官となった。彼はアングロ・スコットランド統合を願っていた。1559年10月に「会衆」側に加わった。

ノックスが大陸からリースに着いたのはこうした闘争の始まった1559年5月3日であった。彼は同年5月11日にパースのセント・ジョン教会において偶像崇拝を激しく非難する説教を行った。何か、事を起こす際、民衆を動かすには、良い意味でも悪い意味でも、彼のようなカリスマ的指導者が必要なのかもしれない。これ以降、宗教改革運動は攻撃的・好戦的となり、プロテスタント信奉の民衆たちによって、パースにおける、カトリック教会、カルトゥジオ修道会、ドミニコ修道会、フランシスコ修道会の修道院は破壊されたのを皮切りに、暴動はスコットランド王国中に広がっていった。摂政に発動を命じられたスコットランド駐留フランス軍と「会衆」たちは衝突し、優勢の「会衆」軍は、パースから進軍し、修道院を破壊・略奪をしながら、1559年6月29日にエディンバラに入った。もうこの時点において、初期の宗教の改革を目指していた信仰を基礎においた「貴族の会衆」の運動は、たとえ、大義名分が宗教的事柄であっても、暴力を伴う反乱、スコットランドにおける内戦運動、否、革命運動と変化していたと言えよう。

ノックスは、1559年7月1日付け、2日付けで摂政宛に手紙を書いている⁹⁾。彼は、「会衆と呼んでいる私たち」¹⁰⁾は、「宗教の名の下に統治権を奪しようと目論んでいると非難されているが、私達は決してそのような事を考えていない」と告げ¹¹⁾、また、『「会衆」たちの目的は、神の栄光を促進し、御言葉の真の説教者を支え守っていくことであり、「摂政に臣民として従う」¹²⁾ことを述べた。王国内で摂政側と「会衆」側との対立が増し、混乱が大きくなるにつれて、ノックスとしてはこうした危機的事態を避けたかったのかもしれない。また同時に、彼は宗教改革者としてできるだけ早く、スコットランドに彼が目指す新しい真の教会であるプロテスタント教会を設立したかったにちがいない。

1559年6月末からノックスは「会衆」の指導者として交渉者として働いた。先ず、彼はイングランドと交渉を始めた。その最大の理由は、スコットランド宗教改革運動をイングランドおよびプロテスタント信奉者エリザベスから支援を求めるためであった。彼は財政的援助と軍事的支援を要求した。ノックスは、「会衆」軍はイングランドの支援がなければ、摂政軍に負けると認識していたと考えられる。ジェーン・ドーソン¹³⁾によれば、英国のウィリアム・セシルは当時、イングランド諸島全体としてのアングロ・スコットランド・ユニオンを構想していたとする。そのため、セシルは、英国兵と「会衆」軍が共に戦った後、それによって、フランス軍をスコットランドから駆逐し、イングランドはスコットランドと同盟関係に入るだろうと予想していた。彼はエリザベスに彼のプランを採用するように説得し、彼女は1560年3月に英軍を派遣した。ところで、エリザベスは、以前、ノックスが著した『最初のラッパの吹奏—女性たちの奇怪な統治に抗して（以下、「最初の吹奏」と記す）』（1558年刊）に非常に不快の念をもっていたことを鑑みれば、この時のノックスとセ

⁹⁾ John Knox, The Works of John Knox, ed. D.Laing vol.1 pp.193-195

¹⁰⁾ Ibid., p.194

¹¹⁾ Ibid., p.194

¹²⁾ Ibid., p.194-5

¹³⁾ Jane E.A.Dawson, 'William Cecil and the British Dimension of Early Elizabethan Foreign Policy', *History*, 74 (1989), p.199

シルのやりとりは、宗教改革運動促進を第一のものとしたものではなく、あくまでも、利害的交渉であったと考えられる。

宗教改革運動の変化の最終的局面は、1559年7月10日のフランス王アンリ二世の死であった。王の突然の死は、フランソワ王太子が王位を継承するということを意味した。こうして、摂政の娘のメアリはフランス女王となり、同時に彼女の同族の者たち、ギーズ家がフランスで実権を握ることになったのである。すなわち、フランスのスコットランド支配がさらに強化され、スコットランドは、ノックスの推進してきたプロテスタント教会をスコットランドに設立ことも不可能となり、ローマカトリック教会とフランスのギーズ家の国家となることを意味していた。そして突然、摂政側は、「会衆」側を圧倒してきたのである。

これらの各局面から判断して、スコットランドにおける宗教改革運動は、政治的、外交的、攻撃的、宗教的といったさまざまな条件が交錯して進んで行ったことがわかる。勢いづいた摂政側とそれに反抗する「会衆」たちの対峙は、内戦へと発展していくと同時に、隣国イングランドやフランスなど国際的な利害関係に深く関わっていたと見なせよう。

3. ジョン・ノックスの「貴族の会衆」に対する期待と彼の役割

ノックスは貴族の会衆にどのようにして期待するようになったか、そして彼の貴族の会衆に対する役割は何であったのかを考えてみよう。不思議なことに、彼は1559年、スコットランドに帰還するまで、ほとんどイングランドや大陸にいてスコットランドのプロテスタント信仰者たちと直接、関係していない。にもかかわらず、彼はその不在中にも「貴族の会衆」たち、会衆の指導層に影響を与え、宗教改革運動に圧倒的な役割を果たしていた。ノックスと彼らの思いは、それぞれ、ノックスは、彼の思い描く福音主義に基づく国家を築き上げるのが貴族の会衆であると期待し、他方、貴族の会衆は、宗教改革運動の指導者であり、精神的リーダーとしてのノックスを頼りにし、敬愛していたのだろう。

詳しく見ていくと、ジョン・ノックスは1545年に改革者ウィシャート¹⁴⁾の出会い、彼の処刑の頃に初めて改革運動に加わった。最初はローマ、フランス、スコットランドを代表とする枢機卿ビートンの暗殺をきっかけとして起こったセント・アンドリュース城に入場し、籠城派の従軍牧師として活躍したが、フランス海軍の来寇によって、彼は捕虜となり、一年間ガレー船の奴隷として苦役に服した。この試練とも言うべき、肉体の衰弱と処女マリアを崇拜せよ、という不断の嘲弄の連続に彼は苦しんだ。この時の自らの体験が、その後の彼が異常なまでに偶像崇拜に対して、嫌悪感を持つ理由であろう。釈放後、彼はエドワード6世治下のイングランドで職を得たが、イングランドではプロテスタント信奉者である王の下、ヘンリ8世治下でカンタベリー大司教となりエドワード6世の下では有力な顧問であった克蘭マーの指導により、宗教の改革が急激に進められていた時

¹⁴⁾ ジョージ・ウィシャート（1513～46）はスコットランドの説教者であった。ルターやカルヴァンの教説に触れて教会改革を志し、大陸亡命から帰国して各地に説教活動を行ったが、ビートン大司教に捕らえられ、セント・アンドリュースにおいて焚刑に処せられた。ノックスに大きな影響を与えた。

期であった。しかし、エドワード6世の死によって、熱烈なカトリック信奉者であるメアリ女王が即位することになり、ノックスは大陸へ亡命することにした。ジュネーブとフランクフルトでさらに改革者としての鍛錬を受けた。ジュネーブでは、神がその選民を通して神の国を地上に建設されると教えるカルヴァンを熱烈に支持することになる。彼は長い亡命生活をおくり、数々の不遇、そして同労者たちの火刑や迫害を目で、耳で聞いてきた。故に、彼は、宗教改革を行うにあたって、妥協を認めず、神意を妨げる統治者に対して、反抗する正当性を、すなわち、抵抗権思想を確立していったと考えられる。バアルの祭司に対しエリヤの如く憤激の情を、彼はカトリックの偶像崇拜者に対して抱いていった。彼にとって、神の言葉の裏付けなしに、作られたミサは、まさに偶像礼拝にほかならず、またキリストの唯一の犠牲を危うくする瀆神行為に思えたのであろう。さて、そのようなノックスの背景を念頭におきながら、彼と貴族の会衆との関係をみてみよう。1554年から1555年にかけての冬に、ノックスはフランクフルトにおいて英国人の会衆のための牧会をしていた。そこで、彼の礼拝規定についての考えを巡って激しい議論となり、彼はフランクフルトを去ることを強いられた。1555年夏の間、ジュネーブで過ごし、同年秋、イングランドのベルヴィックに戻り、ここで、大陸へ逃亡する前に婚約をしていたイングランド人のマジョー・ボーズと結婚した。その後、彼はスコットランドへ向かったが、そこで、彼が福音主義者たちに非常にあたたかく受け入れられた。ギーズのメアリは、正式に前年、摂政となっていたが、既に述べたように、彼女は娘とフランス王子との結婚を承認してもらうため、プロテスタントの信奉者に対して、寛容な態度をとっていた。故にスコットランドのプロテスタント信仰者達はイングランドのプロテスタントたちのように積極的に迫害されることはなかった。ノックスは1555年から1556年の前半は、彼を支持してくれる信奉者たちの家に集まって、即刻即座の伝道に東奔西走し、彼らに牧会をすることが出来た。1556年7月に、彼はジュネーブに戻ったが、その後、彼の活動に次第に恐れをもった、スコットランドの司教たちは、彼を異端者として告発し、エディンバラに召喚した。しかし、ギーズのメアリは、プロテスタント信奉者と対決をすることを嫌って、訴訟手続きを取り消した。ノックスが出発した後、スコットランドの司教たちは彼を異端者として宣告し、彼の肖像画を公然と燃やしたという事実は、彼の伝道活動の影響がいかに大きかったかを示すものであろう。彼は大抵、私的に、また、既に福音主義に共感している聴衆に説教をしたので、既存のプロテスタント支持基盤を広げることができなかったと見られる。

しかし、スコットランド国内を急速に巡って熱く語る伝道活動によって、共通の目的意識をプロテスタント信奉者たちがもつようになったと考えられよう。このようにして、ジェームズ・スチュアート卿やグレンケルン伯やアルガイル伯のような貴族たちの信頼と支援を仰いで、ノックスは2、3年以内に革命をおこすことになった組織化されたプロテスタントの党とも言うべき「貴族の会衆」の基礎を築いたのであった。彼は「貴族の会衆」に宛てて、書簡で述べているように¹⁵⁾、彼らにス

¹⁵⁾ 静岡英和学院大学紀要第14号に掲載の拙著「プロテスタント貴族とジョン・ノックスによるスコットランド宗教改革運動についての一考察(1)」の中の(3)1557年に大陸にいたジョン・ノックスとスコットランドのプロテスタント貴族とで交換され、「貴族の会衆」の発足当時の動きがわかる書簡の翻訳（4～15頁）を参照せよ。

コットランドにおいて、キリストの福音が、真に説かれ、聖礼典が正しく執行されることを説いた。

前述したように、プロテスタント貴族たちは1557年3月にジュネーヴにいるノックスに宛てて、スコットランドにもう一度戻ってくるように要請し、彼らが「神の栄光を推進しようとして生命と財産を賭ける」準備をしたことを明らかにした。ノックスはこの要請にぐずぐずしていたが、彼がディエップに着くやいなや、貴族たちの心変わりを暗示する手紙を受け取ったのであった。1557年10月27日、彼は憤慨しながら、彼らが優柔不断であることがめる怒りの返事を書き、そこで彼は彼らに貴族として彼らの「職務と義務」は、「あなた方の最大限の力を出してすべての暴力と迫害から、あなたがたの臣民を擁護し、救い出す」ことであると主張したのであった。翌年、『アペレーション』の中でノックスが述べている武装蜂起についての発展した理論をこの手紙の中から読み取れよう。彼が貴族たちに期待していることを説明している初期の手紙にはそのことは、「怠慢と困難によって失われた」としている。しかし、12月17日の一つの手紙において、彼は、彼らが迫害から同胞を守るべき義務があると同時に、統治者へ合法的服従をどんなことがあっても否定しないことをはっきりさせた。

以上、1557年当時のノックスは貴族たちに非常に期待していただけに彼らの動きに真意がつかめず、翻弄されていたと言えよう。また、彼の困惑の原因はスコットランド内で起こっている動きを把握していなかったことにもよるであろう。翌1558年にはノックスは、彼らとは距離を置くかの如く、宗教改革運動を実行するための理論を構想している。『最初の吹奏』、『摂政への書簡』、『アペレーション』、『スコットランドの平民あての書簡』と次々に発表した。これらの著述において、彼は具体的に宗教改革の方法を提示し、司教らの悪に抵抗せず、それを黙認する者にも、罰が及ぶことを強調して、貴族と平民が宗教改革のために共に立ち上がることを示した。すなわち、ノックスはスコットランド王国内の全プロテスタントの団結と決起を呼びかけたのである。

1558年の夏に発行された『摂政への書簡』は1556年5月にノックスがスコットランド滞在中にギーズのメアリに宛てて訴えた書簡の細く改訂版であった。1556年において、ノックスは摂政を説得して、プロテスタント信奉者たちに寛容方針をとっていた彼女が福音主義に変更する可能性があるかもしれないと思っていた。ノックスの目的は、あくまでもスコットランドにおいて神の御言葉に従って、宗教の改革を行う摂政としての義務を示すことであった。しかしながら、彼は摂政の夫と二人の息子が亡くなったことを引用して、「神の怒りと神の激しい不満」の証拠として紹介し、他方、『最初の吹奏』と反復して、「女性たちが至福と喜びを持って長く支配することは滅多にない」ことを彼女に説いた。ノックスは、摂政を説得して偶像崇拜をやめさせられるかもしれないというかな望みをもっていたのであろう。続いて『アペレーション』は、ノックスの政治的著作の中でもっとも重要なものであるが、彼の目的は一人の敬虔なる王の義務を規定し、貴族たちと身分政議会（つまり事実上、スコットランドのエリートたち）の義務と、最後にはコモナルティ、すなわち、平民の義務をも明らかにすることであった。『アペレーション』は、1556年にノックスに対してスコットランドの聖職者たちが死刑宣告を発した「残忍でもっとも不正な宣告」に抗して、スコットランドの貴族たちと議会に訴えたものであった。『アペレーション』の中で、彼は上級行政官は宗

教を改革する権威を持つと同様に、聖職者を訓練する権威を持っていると主張した。そして、この議論を、彼は単に国王である上位の行政官ばかりでなく、貴族である王国の行政官にも適用できるとした。ノックスは、「人は皆、上に立つ権威に従うべきです」と示すローマの信徒への手紙13章を否定することなく、にもかかわらず、不敬虔な統治に対して貴族たちが抵抗できる理論を入念に作り上げた。この理論における鍵となる要素は、パウロが「権威（複数）」は、神によって定められていると述べたように、それぞれの王国には二者択一の――下位のものであろうとも――行政官が存在していて、行政官の務めは、王のものと同様に、神聖な機関の務めであり、その義務は王のものと同様に、神の法に従い、宗教を改革することなのであると主張したのである。スコットランドの下位の行政官とは、主として、貴族を指していた。故に、ノックスは『アペレーション』で、貴族らに対して、「神によって任命された合法的な権威（複数）」と述べていると考えられる。ここに、ノックスが、貴族の会衆たちに王と同様に彼らにも宗教を改革する務めがあることを確信をもって示していることから、彼らこそ、宗教改革の推進者となると期待しているとみられる。彼の理論は、「もしあなたがた（以下、「あなたがた」の傍点は拙著が付記したもの）が神によって権威（複数）があるなら、（そしてすべての人が、認めることを希望するのだが）それで、その使徒の明白な言葉によって、その剣は、罪のない者を守るため、そして悪者を罰するために神によってあなたがたに与えられている」ということを貴族たちに説明している。敬虔なる君主と同様、敬虔なる貴族はキリスト教の規律において正義の剣を行使することができるのであるとし、上位の権力者がその反対のことを命じるとき、下位の行政官は神によって任じられた彼らの働きを果たすべきである。そうすることで、今や、敬虔なるプロテスタントの行政官が、すなわち、貴族の会衆たちが、邪悪なカトリックの支配者から神に選ばれた無実な者たちを守る義務があると主張したのであった。さらに、この見解から、すぐに、「神はあなたがたをあなた方の兄弟たちを支配する統治者や支配者として立てた。神はあなたがたの手に正義の剣を持たせて武装しあなたがたの王の怒りを抑制し、また、神の祝福すべき命令に明らかにそむくときはいつもその王たちの横柄さを抑圧するくつわとして命じられてきたのである」というよりラディカルな結論を示している。

しかし、それは単に権力（複数）が神によって命じられパウロのことばを複数形にするという方策を基礎にした一歩というだけではなかった。自然に、一人の下位の行政官という発想は、ローマの信徒への手紙の中で従うべき従順命令に逆らうものではなかった。ノックスは行政官、すなわち、貴族達には不敬虔な支配者に抵抗する権利が与えられていると設定するとともに、さらに、国王の務めに服従する神の命令を否定することなく、反抗することを認める方法を見いだしたのであった。

さらに、『アペレーション』の中で、ノックスは、「私は、異教徒たちが（キリスト・イエスと真の宗教を受容する異教徒たちの各都市、王国、領土、国民を指しているのだが）、神がイスラエルの民と結んだ同じ同盟と契約とに結ばれていることを恐れずに断言する」とした。彼は、イングランドとスコットランドの状況を比較し、「真の宗教を打倒することに骨を折る者を処刑することは合法的なことである――それは、イゼベルと呼ばれる彼らの女王メアリ¹⁶⁾を含むのであるが――、とた

¹⁶⁾ 女王メアリとは、イングランドのメアリ1世（1516～1558）のことである。ヘンリー8世と最初の王妃キャサリン・オブ・アラゴンとの娘で、プロテスタントに対する過酷な迫害を行い、ブラッディ・メアリー（血まみれのメアリー）と呼ばれた。

めらわずに言い放っている。イングランドの人々と違って、スコットランドの人々は、公けにプロテスタント信仰を受け入れてはいなかった。故に私的教会が設けられていた。また、イングランドのように契約で結ばれてはいなかった。故にノックスのスコットランド貴族への指示は、彼らの主権者であるメアリ・スチュアートや彼女の後継人であるギーズのメアリを処刑する要求ではなかった。すなわち、スコットランドに対する彼の助言は、王にではなく、カトリック聖職者を罰することを目指していたことがわかる。「もし、あなた方の手に神が剣を持たせられたことを知ったら…そのとき、あなたがたは執拗で、厚かましい偶像崇拜者たち（すべての司教たちのような）を罰するのはあなた方の勤めであることは否定できず、むしろ、義務なのである」と述べている。『アペレーション』の中で用いられた契約についての考え方は、ノックスが、1558年の一連の論文において、スコットランドとイングランドに対して着手し始め、さまざまなプログラムを企図するときに直面した困難な事態を解決するのに役だったようである。『アペレーション』の中で、契約の下で、人々は偶像崇拜者たちを罰し、神の主権に反対する違反者たちに復讐する義務があることについて述べている。実際、上位の行政官に真の説教者を要求し、確立し、必要なら守るように、また、「あなたがたの偽司教たちや聖職者たちがあなたがらから不正に受け取る、十分の一税である収入を阻止するように」と人々に助言する以上のことを求めなければならないとしている。

彼の1558年の一連の論文を解釈するには、1559年5月にノックスがスコットランドに戻ったあと、摂政に対するプロテスタント信奉者たちの武装抵抗の背後に彼の思想的背景があった。既に述べたように、1558年4月にフランス王太子とメアリ・スチュアートが結婚し、6ヶ月後エリザベスがイングランドの王位についた、そのことによってギーズのメアリはプロテスタント信奉者たちに対する寛容政策を方向転換し、対決政策をとることになった。さらに、ノックスはスコットランドに着くや、偶像崇拜に反対する説教を行ない、偶像破壊者のおこす騒乱をおこさせた。このことにより、ますます両者の対立は深まっていった。その反乱はまさに、ノックスの打ち立てた抵抗権論が実際に施行されたようであった。

ノックスの目的はあくまでも、偶像崇拜を排し、新しい教会をスコットランドに作ることであり、その教会とは、スコットランド信条に謳われているように、神の言葉の真の説教、キリスト・イエスの聖礼典の正しい執行、および、神の言葉の規定するとおりに、正しく行われる教会規律の営まれる、彼の信じる「真の教会」のことである。その教会を立てるには、まず、今の偶像崇拜が行われているカトリック教会を支持している摂政ギーズのメアリが統治している政権が替わらなければならず、それを期待できるのが、そして実行できるのが、貴族の会衆を中心とするプロテスタントの会衆たちであるとノックスは確信したのであると考える。

4. 摂政の解任に至る経緯

「会衆」軍と「摂政」軍は、最初はプロパガンダ戦争であった。1559年8月28日、摂政はスコットランド王国の自由を抑圧するためにフランス軍を呼びよせるという噂は真実ではなく、また、リース休戦協定にはフランス軍の派遣を禁止する条項は含まれておらず、「会衆」の説教者たちは上級

権力者を中傷しているが、これは煽動的行為であり暴動であると宣言し布告した¹⁷⁾。これに対して「会衆」側は「スコットランド王国の貴族、自治都市、およびコミュニティ」宛てに、摂政の行動について「この王国の貴族と諮問会の助言、もしくは同意なしに行われ、故に、明瞭にわれわれの古来の法と自由に反している¹⁸⁾」と摂政の暴政を非難した。その後、この論戦は新たな局面を迎えた。同年9月、アラン伯がスタルリングの「会衆」に合流し、また、シャートルロー公が「会衆」に加わった時からである。二人が参加したスタルリングの「会衆指導層」の会合は貴族層の新たな審議機関となり女王不在のスコットランドにおける事実上の国制機関となっていたのである。同年10月15日、シャートルロー公の下、スタルリングに会衆は参集し、エディンバラに進軍し、占領した。彼らの主張は繰り返し、統治者である摂政に宗教改革の推進を訴えたにもかかわらず、摂政はそれに応えなかった故に、別の、国制機関が摂政に替わるべきだとした。それは「宗教を改革する機関は、聖職者とか、あるいは国王という名の主要統治者よりも多くの人々に属するから¹⁹⁾」だとした。同年10月19日、「会衆」軍はリースに退いた摂政側に対し、リースの要塞化を中止するように求めたが、それが拒否され、21日、会衆側はギーズのメアリの、摂政権を剥奪することを決し、「摂政職停止法」が作成され、会衆指導層がこれに署名し、摂政職の解任されることとなった。その後、会衆指導層の再組織化が行われて、30名の名士より成る委員会である「スコットランド大協議会」が設けられ、国王と女王不在中、王国を統治することが宣言された。ここで、最初は「力と財力と肉体を持って」「恵みに満ちた御言葉とその会衆を維持し、助け、確立することを」、また、「牧師が純粋に、真実に、キリストの福音と sacrament を神の民に執りなす」ことが出来るように牧師を支え、守り、そして「迷信、醜行、偶像崇拜をもったサタンの集まり」のカトリシズムを拒絶することを、そして「たとえ、死を賭けても」自分たちは「神の勝利を確信し、主のために戦う」ことを誓った。このようにして、1557年には宗教の改革を目的として参集した小さなグループであった「貴族の会衆」がその二年後には、会衆の指導層として、スコットランド王国の政権を握るほどの政治組織の中心となっていたのである。

5. おわりにー「貴族の会衆」の意義について

以上、1557年～1559年における摂政ギーズのメアリの統治下におけるプロテスタント貴族の会衆とジョン・ノックスによるスコットランドにおける宗教改革運動について考察してきた。上記で述べたように1559年10月に会衆による、ギーズのメアリの摂政職停止宣言がなされた。それから摂政側と会衆側は戦いを続けたが、翌1560年6月に、摂政は亡くなり、同年7月には宗教改革戦争は終了した。同年8月には宗教改革議会が成立し、ローマ教皇権の否認をした。このようにスコットランドにおける宗教改革運動が劇的な変化を遂げる中で、ノックス等プロテスタント説教者たちは、スコットランド信条を作成し、遂に、改革派の教会を建て上げることになる。スコットランドは、

¹⁷⁾ Works, I.397-9

¹⁸⁾ Works, I.404

¹⁹⁾ Works, I.134

この短期間ではあるが、一方に、カルヴァン主義に基づくスコットランド教会を打ち立てることを目標にもち、そのために積極的抵抗権論を構想し、スコットランドにおける宗教改革運動をリードしようとした、カリスマ的な宗教改革者ジョン・ノックスが存在し、他方、スコットランドにおける宗教改革を行うことを志した貴族の会衆たちが、ノックスに鼓舞されつつ、運動の核となり、さらに摂政のフランス向きの政策へのスコットランド人としての反発も併せ、またイングランド寄り傾向のスコットランド貴族のプロテスタントたちを取り込み、さらにスコットランドの民衆を巻き込むことができたと考える。以上、これまで考察してきたように、1557年から1559年におけるスコットランドにおける宗教改革運動の期間はスコットランドの宗教改革運動を成功させるために非常に重要な期間であったと言えよう。

(一次史料)

John Knox, The Works of John Knox, ed. D.Laing, 6 vols, Edinburgh. 1846-64

John Knox, John Knox's History of the Reformation in Scotland, ed. William Croft Dickinson, vol.1, Edinburgh, 1949

David Laing(ed.), Selected Writings of John Knox, Edinburgh, 1846, p.439-470

(参考文献)

飯島啓二『ノックスとスコットランド宗教改革』、日本キリスト教団出版局、1976年

伊勢田奈緒（訳）、ジョン・ノックスによる宗教改革文書（1）—1556年に神の御言葉の牧者であるジョン・ノックスからスコットランドの摂政メアリへ差し出した書簡と1558年著者によって補足説明された文書（1）—「環境と経営」第20巻1号（静岡産業大学）2014年6月、119～126頁

伊勢田奈緒（訳）、ジョン・ノックスによる宗教改革文書（1）—1556年に神の御言葉の牧者であるジョン・ノックスからスコットランドの摂政メアリへ差し出した書簡と1558年著者によって補足説明された文書（2）—「環境と経営」第20巻2号（静岡産業大学）2014年12月

今井宏（編）『イギリス史』、山川出版社、1990年

久米あつみ（訳）『宗教改革著作集』第9巻、教文館、1984年

出村／丸山／飯島（共訳）『宗教改革著作集』第10巻、教文館、1993年

八代／中村（共訳）『宗教改革著作集』第12巻、教文館、1984年

八代崇『イングランド宗教改革史』聖公会出版、1993年

G. ドナルドスン『スコットランド絶対王政の展開』飯島啓二（訳）、未来社、1972年

Agnes Mure Mackenzie, The Scotland of Queen Mary, Edinburgh, 1957

Andrea Thomas, The Court of James V of Scotland, Edinburgh, 2005

Brown, P.H., John. Knox. I, Edinburgh, 1905

Brown, P.H., History of Scotland, vol.II, Cambridge, 1911

Gordon Donaldson, The Scottish Reformation, Cambridge, 1960

G. Barnett Smith, John Knox and the Scottish Reformation, London

Ian B. Cowan, Regional Aspects of the Scottish Reformation, London, 1978

Jane Dawson, John Knox, New Haven and London, 2015

Pamela E. Rirchie, Mary of Guise in Scotland, East Lothian, 2002

Rosalind K. Marschall, Mary of Guise, Edinburgh, 2001